

中島
敦

名人
伝



名人伝

趙ちようの邯鄲かんたんの都に住む紀昌きしようという男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己おのれの師たのと頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとっては、名手・飛衛ひえいに及ぶ者があるうとは思われぬ。百歩を隔へだてて柳葉りゆうようを射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々はるばる飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新入の門人に、まず瞬またたきせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台はたおりだいの下に潜もぐり込んで、

そこに仰向けあおむにひっくり返った。眼めとすれすれに機躡まねきが忙しく上下往来するのをじつと瞬かずに見詰みめていようという工夫くふうである。理由を知らない妻は大いに驚おどろいた。第一、妙みような姿勢を妙な角度から良人おっとに覗のぞかれては困るという。厭いやがる妻を紀昌は叱しかりつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼かれはこの可笑おかしな恰好かつこうで、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後のちには、遽あわただしく往返する牽挺まねきが睫毛まつげを掠かすめても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやくやく機の下から匍出はいだす。もはや、鋭利えいりな錐きりの先をもつて瞼まぶたを突つかれても、まばたきをせぬまでに

なっていた。不意に火の粉が目に飛入ろうとも、目の前に突然灰神楽とつぜんはいかぐらが立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の瞼はもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡じゆくすいしている時でも、紀昌の目はカツと大きく見開かれたままである。ついに、彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹ぴきの蜘蛛くもが巣すをかけるに及んで、彼はようやくよく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた。

それを聞いて飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射しやを授けるに足りぬ。次には、視みることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微びを見ること著ちよ

のごとくなつたならば、きた来つて我に告げるがよいと。

紀昌は再び家もとに戻り、肌着はだぎの縫目ぬいめから虱しらみを一匹探し

出して、これを己おのが髪かみの毛をもつてつな繫いだ。そうして、

それを南向きの窓に懸かけ、終日にら睨み暮くらすことにした。

毎日毎日彼は窓にぶら下つた虱を見詰める。初め、もち

ろんそれは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然いぜん

として虱である。ところが、十日余り過ぎると、氣のせ

いか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来

たように思われる。三月目みつぎめの終りには、明らかにかいこ蚕かいこほ

どの大きさに見えて来た。虱を吊つるした窓の外の風物は、

次第に移り変る。熙々として照っていた春の陽はいつか
 烈しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡って行つ
 たかと思うと、はや、寒々とした灰色の空から雲が落
 ちかかると。紀昌は根気よく、毛髪もうはつの先にぶら下つた有吻ゆうふん
 類・催痒性さいようせいの小節足動物を見続けた。その虱も何十匹と
 なく取換とりかえられて行く中に、早くも三年の月日が流れた。
 ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見
 えていた。占しめたと、紀昌は膝ひざを打ち、表へ出る。彼は
 我が目を疑った。人は高塔こうとうであつた。馬は山であつた。豚ぶた
 は丘おかのごとく、雞とりは城楼じょうろうと見える。雀じゃくやく躍して家にとつ

て返した紀昌は、再び窓際の虱えんかくに立向い、燕角ゆみの弧さくほうに朔蓬さくほうの節籥やがらをつがえてこれを射れば、矢は見事に虱の心の臍つらぬを貫つらぬいて、しかも虱を繫いだ毛さえ断きれぬ。

紀昌は早速さつそく師の許もとに赴おもむいてこれを報ずる。飛衛は高蹈こうとうして胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒ほめた。そうして、直ちに射術の奥儀秘伝おうぎひでんを剩あますところなく紀昌に授け始めた。

目の基礎訓練に五年もかけた甲斐かいがあつて紀昌の腕前うでまえの上達は、驚くほど速い。

奥儀伝授が始まってから十日の後、試みに紀昌が百歩

を隔てて柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日の
 後、いっぱいねらに水を湛たくえた盃さかずきを右肱ひじの上に載のせて剛弓ごうきゆう
 を引くに、狙ねらいに狂くるいの無いのはもとより、杯中の水も
 微動だにしない。一月ひとつきの後、百本の矢をもつて速射を試
 みたところ、第一矢がま的とに中あたれば、続いて飛来とつた第二
 矢は誤あたず第一矢の括やはに中あつて突き刺ささり、更さらに間髪
 を入れず第三矢の鏃やじりが第二矢の括やはにガツシと喰くい込む。
 矢矢相属ししし、発発相及はっはつんで、後矢の鏃やじりは必ず前矢の括やはに
 喰入くるが故に、絶えて地に墜おちることがない。瞬まく中に、
 百本の矢は一本のごとくに相連あなり、的あから一直線ちに続

いたその最後の括はなお弦げんを銜ふくむがごとくに見える。傍で見えていた師の飛衛も思わず「善し！」と言った。

二月ふたつきの後、たまたま家に帰って妻といさかいをした紀昌おどがこれを威おどそうとて烏号うごうの弓きえいに綦衛の矢をつがえきりひきしほりと引絞ひきしほって妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つてかなたへ飛び去ったが、射られた本人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主ていしゆを罵ののしり続けた。けだし、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達していたのである。

もはや師から学び取るべき何もものも無くなつた紀昌は、ある日、ふと良からぬ考えを起した。

彼がその時独りつくづくと考えするには、今や弓をもつて己に敵すべき者は、師の飛衛において外ほかに無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。秘ひそかにその機会を窺うかがつてゐる中に、一日たまたま郊野こうやにおいて、向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇であつた。とつさに意を決した紀昌が矢を取つて狙いをつければ、その気配を察して飛衛もまた弓を執とつて相応ずる。二人互たがいに射れば、矢はその度に中道にして相

当り、共に地に墜ちた。地に落ちた矢が軽塵けいじんをも揚あげな
 かったのは、兩人の技がいずれも神しんに入っていたからで
 あろう。さて、飛衛の矢が尽つきた時、紀昌の方はなお一
 矢を余していた。得たりと勢込んで紀昌がその矢を放て
 ば、飛衛はとつさに、傍なる野茨のいばらの枝えだを折り取り、その棘とげ
 の先端せんたんをもつてハツシと鏃さを叩たたき落した。ついに非望の
 遂とげられないことを悟さとった紀昌の心に、成功したならば
 決して生なまじなかつたに違ちがいな道義的慚愧ざんきの念が、この
 時忽こつえん焉として湧起わきおこった。飛衛の方では、また、危機を脱だつ
 し得た安堵あんどと己が伎倆ぎりようについての満足とが、敵に對する

憎しみをすつかり忘れさせた。二人は互いに駈寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。(こうした事を今日の道義観をもつて見るのは当たらない。美食家の斉の桓公が己のいまだ味わったことのない珍味を求めた時、厨宰の易牙は己が息子を蒸焼にしてこれをすすめた。十六歳の少年、秦の始皇帝は父が死んだその晩に、父の愛妾を三度襲うた。すべてそのような時代の話である。)

涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかる企みを抱くようなことがあっては甚だ危いと思つた飛衛は、

紀昌に新たな目標を与えてあたその氣を転ずるにしくはないと考えた。彼はこの危険な弟子に向って言った。もはや、伝うべきほどのことはことごとく伝えた。爾なんじがもしこれ以上この道の蘊奥うんのうを極めたいと望むならば、ゆいて西方かたたいこう大行の嶮けんに攀よじ、霍山かくざんの頂を極めよ。そこには甘蠅かんよう老師とて古今ここんを曠むなしゆうする斯道しどうの大家がおられるはず。老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど兎戯じぎに類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまいと。

紀昌はすぐに西に向って旅立つ。その人の前に出ては
 我々の技のごとき兎戯にひとしいと言った師の言葉が、
 彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天
 下第一を目指す彼の望も、まだまだ前途程遠い訳である。
 己が業わざが兎戯に類するかどうか、とにもかくにも早くそ
 の人に会って腕を比べたいとあせりつつ、彼はひたすら
 に道を急ぐ。足裏を破り脛すねを傷つけ、危巖きがんを攀さんじ栈道さんどうを
 渡って、一月の後に彼はようやく目指す山顛さんてんに辿たどりつく。
 気負い立つ紀昌を迎えたむかのは、羊のような柔和にゆうわな目を
 した、しかし酷ひどくよぼよぼの爺じいさんである。年齢は百歳

をも超えていよう。腰の曲っているせいもあって、白髯は歩く時も地に曳きずっている。

相手が聾かも知れぬと、大声に遽だしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見てもらいたいむねを述べると、あせり立った彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋の弓を外して手に執った。そうして、石碣の矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向って狙いを定める。弦に応じて、一箭たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切って落ちて来た。

一通り出来るようじゃな、と老人が穏かな微笑を含

んで言う。だが、それは所詮射之射しよせんしやのしやというもの、好漢い
 まだ不射之射ふしやのしやを知らぬと見える。

ムツとした紀昌を導いて、老隱者ろういんじやは、そこから二百歩
 ばかり離れた絶壁ぜつぺきの上まで連れて来る。脚下きやつかは文字通り
 の屏風びょうぶのごとき壁立千仞へきりつせんじん、遙か真下に糸のような細さに
 見える溪流けいりゆうをちよつと覗いたただけでたちまち眩暈めまいを感
 ずるほどの高さである。その断崖だんがいから半ばなか宙に乗出した
 危石の上につかつかと老人は駈上り、振返ふりかえって紀昌に言
 う。どうじゃ。この石の上で先刻の業を今一度見せてく
 れぬか。今更引込ひっこみもならぬ。老人と入代りに紀昌がその

石を履ふんだ時、石は微かすかにグラリと揺ゆらいだ。強しいて気を励はげまして矢をつがえようとすると、ちようど崖がけの端はしから小石が一つ転がり落ちた。その行方ゆくえを目で追うた時、覚えあせず紀昌は石上に伏ふした。脚あしはワナワナと顫ふるえ、汗あせは流ながれて踵かかとにまで至いたった。老人が笑いながら手を差し伸のべて彼を石から下し、自ら代かってこれに乗ると、では射やというものをお目めにかけようかな、と言いった。まだ動悸どうきがおさまらず蒼あおざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに気が付しいて言いった。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？

老人は素手すてだったのである。弓？ と老人は笑う。弓

矢の要る中はまだ射之射じや。不射之射には、烏漆の弓も肅慎の矢もいらぬ。

ちようど彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が悠々と輪を画いていた。その胡麻粒ほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引絞ってひようと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。

紀昌は慄然とした。今にして始めて芸道の深淵を覗き得た心地であった。

九年の間、紀昌はこの老名人の許に留^{とど}まった。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰^{だれ}にも判^{わか}らぬ。

九年たって山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変ったのに驚いた。以前の負けず嫌^{ぎら}いな精悍^{せいかん}な面魂^{つらだましい}はどこかに影^{かげ}をひそめ、なんの表情も無い、木偶^{でく}のごとく愚者^{ぐしや}のごとき容貌^{ようぼう}に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆^{かんとん}して叫^{さけ}んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕^{われら}のごとき、足下^{あしもと}にも及ぶものでないと。

邯鄲の都は、天下一の名人となって戻って来た紀昌を

迎^{むか}えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返った。

ところが紀昌は一向にその要望に応^{こた}えようとしなない。

いや、弓さえ絶えて手に取ろうとしない。山に入る時に携^{たず}えて行った楊幹麻筋の弓もどこかへ棄^すてて来た様子

である。そのわけを訊^{たず}ねた一人に答えて、紀昌は懶^{ものう}げ

に言った。至^し為^いは為^なす無く、至^し言^いは言^なを去り、至^し射^いは射

ることなしと。なるほどと、至^し極^{ごく}物^{もの}分^{わか}りのいい邯鄲の都

人士はすぐに合^が点^{てん}した。弓を執らざる弓の名人は彼等の

誇^{ほこ}りとなつた。紀昌が弓に触^ふれなければ触れないほど、

彼の無敵の評判はいよいよ喧伝けんでんされた。

様々な噂うわさが人々の口から口へと伝わる。毎夜三更さんこうを過ぎる頃ころ、紀昌の家の屋おくじよう上で何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。名人の内に宿る射道の神が主人公の睡ねむっている間に体内を脱ぬけ出し、妖魔ようまを払はらうべく徹宵てっしやう守護しゆごに当あっているのだという。彼の家の近くに住む一商人はある夜紀昌の家の上空で、雲に乗った紀昌が珍めづらしくも弓を手にして、古いにしえの名人羿げいと養由基の二人を相手に腕比うでひべをしているのを確かに見たと言いい出した。その時三名人の放はなった矢はそれぞれ夜空に青白せいぱくい光芒こうぼうを曳ひきつつ

参宿さんしゆくと天狼星てんろうせいとの間に消去しょうそつたと。紀昌きしょうの家いへに忍しのび入
 ろうとしたところ、堀へいに足を掛かけた途端とたんに一道いどうの殺ころ気が
 森閑しんかんとした家いへの中なかから奔はしり出でてまともに額ひたいを打うつたの
 で、覚おぼえず外そとに顛落てんらくしたと白状とうぞくした盗賊とうぞくもある。爾来じらい、
 邪心じゃしんを抱かく者共ものどもは彼の住居ぢゆうの十町四方じゅうちやうしやうは避さけて廻まわり道みちを
 し、賢かしこい渡り鳥共わたりのどりどもは彼の家いへの上空じやうくうを通とおらなくなつた。
 雲うんと立罩たちこめる名声なせいのただ中なかに、名人めいじん紀昌きしょうは次第しだいに老おい
 て行く。既すでに早く射やを離はなれた彼の心こころは、ますます枯淡虚静こたんきよせい
 の域いきにはいつて行いつたようである。木偶ぼくのごとき顔かほは更さら
 に表情へいしやうを失うい、語かたることごとも稀まれとなり、ついには呼吸こその有あ

無さえ疑われるに至った。「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる。」というのが、老名人晩年の述懐じゆつかいである。

甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に煙けむりのごとく静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にすることが無かった。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあろうはずが無い。もちろん、寓話ぐわ作者としてはここで老名人に掉尾とうびの大活躍だいかつやくをさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らか

にしたいたいのには山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶えみおぼのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途ようとも思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が

冗談じょうだんを言っているとのみ思つて、ニヤリととぼけた笑
 い方をした。老紀昌は真剣しんけんになつて再び尋ねる。それで
 も相手は曖昧あいまいな笑を浮かべて、客の心をはかりかねた様子
 である。三度紀昌が真面目まじめな顔をして同じ問を繰返くりかえした
 時、始めて主人の顔に驚愕きょうがくの色が現れた。彼は客の眼
 を凝乎じつと見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、
 気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違えをして
 いるのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖きょうふに
 近い狼狽ろうばいを示して、吃どもりながら叫んだ。

「ああ、夫子ふうしが、——古今無双ここんむそうの射の名人たる夫子が、

弓を忘れ果てられたとや？　ああ、弓という名も、その
使い途みちも！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠かくし、
楽人は瑟しつの絃げんを断ち、工匠こうしやうは規矩きくを手にするのを恥はじ
たということである。

（昭和十七年十二月）

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館